室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ドイツ自由主義に関する一考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-06-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 白石, 正夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3349

ドイツ自由主義に関する一考察

白 石 正 夫

A Study on German Liberalism

Masao Shiraishi

Abstract

When we consider the causes for which Hitler won a victory, we can first point out the weakness of liberal tradition in Germany. Why, then, couldn't Germany achieve liberal progress in politics? F. Stern attributes the cause to the unpolitical attitude of upperclass Germans, asserting that their unpolitical attitude originates in German Idealism.

This paper attempts not only to introduce and criticize Stern's article, 'The Political Consequences of the Unpolitical German', but also to consider some features of German Liberalism.

(一)

1933年におけるナチスの勝利を語る際，それを20世紀的現象として捉え，その経済的，社会的，政治的原因が探究されねばならないことはいうまでもない。しかし，同時に，それをドイツ的現象として，ドイツの歴史的発展過程の中に，その原因を求めることも看過されてはならないであろう。近代以降のドイツ史の延長線上にナチスを位置づける場合，ドイツ史の特徴として，自由主義的伝統の脆弱さを指摘することができよう。なぜドイツは西欧的，自由主義的な発展を遂げることができなかったのか。

まず，政治的自由の要求の前に立ち塞がる旧支配勢力の強さ。資本主義的発展の後進性に起因するブルジョアジーの弱さ。ブルジョアジーの急進的運動に対する恐怖。上からの改革によってもたらされた経済的自由に対するブルジョアジーの満足。そして，なによりも国家統一の必要性。近代的民族国

家として近代史をスタートすることに出遅れたドイツにとっては，統一国家の実現が急務であり，全国民的課題であった。従って，自由主義者もまた「自由」の要求とともに「統一」の課題を担わねばならなかったのである。ヨーロッパ諸列強の面前で，この任務を果そうとする時，「自由」と「統一」のうち，後者に重点が置かれるに至るのは必然であろう。こうして，ドイツにおいては，自由主義は旧勢力に真正面から対立するものではなく，それに依存し，妥協しながら改革を実現しようとする穏健自由主義たらざるをえなかったのである[1]。プロイセン憲法紛争の中での進歩党の動揺と解体，国民自由党の成立，ここで最終的に，自由主義者は屈服したとされている。この屈服を，後世史家は，同情あるいは断罪をもって評価するのである。しかし，上に述べたような特質をもつドイツ自由主義者にとって，果してそれが屈服と感じられたかどうか自体が問題とされねばならないであろう。ともあれ，ドイツ自由主義の脆弱性を語る時，論点の核心となるのは，この「自由」と「統一」，リベラリズムとナショナリズムのディレンマであるといえよう[2]。

ドイツ自由主義の弱さの理由として，以上の如き政治的原因のみならず，精神的，思想的伝統にもその原因が求められねばならない。プロテスタンティズム（ルター）が，ドイツにおける精神的伝統としてまず問題となる。ルターの宗教改革が，ドイツにおける自由主義の精神的起源だとされているからである[3]。だが，ルターの主張したのは，個人の内面的自由であって，市民的，政治的自由ではなかった。逆にルターは，外的世界における服従を説いたのである[4]。かくて，外的世界での隷従と内面世界における自由の結合，これがドイツ精神史の特徴となった[5]。ドイツにおいては，自由はまず個人の内面的自由と理解された。

更に，西欧の自由主義的思想運動の影響下に形成されたといわれるドイツ理想主義においては，自由はどう捉えられていたか。そこでも，やはり自由は，市民的，政治的自由ではなく，個人の精神的自由，人格形成の自由であり，内面的なものが強調されていたのである[6]。その意味で，この理想主義は，ドイツ・プロテスタンティズムの精神的末裔といって差支えないであろ

う。所詮罪の世界である邪悪な外的世界は，個人の自由とは無縁であり，自由とは，理想的な精神世界に到達するための，いわば義務としての自由であり，人間の成長は，国家的政治生活から生じるものではないとする。ドイツにおいては，自由はこのようなものであった。それは，トレルチのいう如く，まさに「ドイツ的自由」であったのである。このような精神，思想伝統の下に生きる人々にとっては，政治的自由の欠如が，必ずしも苦痛と感じられなかったのではなかろうか。

最後に，ドイツ自由主義に不吉な影と弱さを与えたものとして，ナショナリズムの思想的伝統を挙げねばならない。ロマン主義，歴史法学，ヘーゲル哲学は，国家を精神的本質をもつもの，倫理的理念の具現とし，国家を聖化し，絶対化することによって，ドイツ・ナショナリズムの先駆となり，強固な思想的基盤となった。自由とは，この国家に服し，義務的に献身することだとされたのである。これが，ロマン主義の「崇高な政治的無関心」[7] に支えられつつ，長い封建的，絶対主義的支配という現実の下で，「政治・社会的退嬰主義」[8]，「臣従根性と市民的勇気の欠如」[9] 等といった所謂ドイツ的国民性を形成し，自由主義の戦線を強大なものにするのを妨げたといえよう。そればかりか，ただでさえひ弱なその自由主義自体を，妥協的，「ぬえ」的性格をもった「有機的リベラリズム」[10] たらしめたのである。また，1813 年の熱狂，1866 年の「屈服」，1914 年の昂揚，ナチズムの受容も，このような民族主義，国家主義思想の国民的規模での浸透を抜きにしては説明されえない。

以下に取り扱う F. スターンの論文[11] は，ドイツ自由主義の脆弱性の原因を非政治的理想主義に求めている。彼は，ドイツ社会の特徴をイリベラリズムとして捉え[12]，その例証の一つとして，ドイツ市民階級の信仰，心情，理想，政治に対する態度を問題としている。彼は，二つのドイツ（悪人のドイツと善人のドイツ）という把握の仕方に反対し，良きドイツ人，即ち極めて教養高く，社会において指導的地位にある市民階級は，1918 年以前も，1933 年以後も，悪いドイツ人によって打ち負かされたとは感じておらず，常に自

らを自由だと考えていたと主張している。なぜ，彼等は，帝国の愚劣な独裁の下で，またヒトラーの暴政下で，不自由を意識することがなかったのか。それを説明するのが，非政治的理想主義だとスターンは論じているのである。先に，ドイツ自由主義の脆弱性の原因を概観した中で，二つの疑問を提出しておいた。即ち，自由主義のナショナリズムとビスマルクへの所謂「屈服」は，真に屈服として受け取られたのか。「ドイツ的自由」の精神的，思想的伝統の中では，政治的自由の欠如が，苦痛と感じられなかったのではないか。この問に対する一つの解答が，スターンのこの論文で与えられていると思われる。

そこで，(二)節において，スターンの論文を要約し，(三)節で，上記の問題に対する彼の主張を検討しよう。

(二)

ナポレオン支配によって覚醒せしめられたドイツ・ナショナリズムは，ドイツ文化の優越性に対する誇りの感情を主たる内容とするものであった。ドイツは，政治権力での敗北を，精神文化の勝利によって回復せねばならぬ，ということが叫ばれたのである。かくて，教育の必要性，人文主義的修養による個人の自己完成が，一つの信仰箇条となった。この文化崇拝は，ドイツ社会に深刻な影響を与えることとなった。第一に，宗教（プロテスタンティズム）の世俗化が進行したことである。即ち，宗教は倫理的要素に還元され，文化こそが人間精神最高の発現だとされた。文化が宗教にとって代ったのである。第二に，長くドイツ教養階級の護符となったひとつの信条を生み出したことである。即ち，個人は政治的諸条件とは全く無関係に自己を完成しうる，という理想主義の教義がそれである。文化崇拝は，こうして，ドイツ教養階級のいわば「理想主義教」を生ぜしめた。

ところで，このタイプの個人主義は，極めて貴族主義的であって，自然法論的な，またキリスト教的な平等主義は完全に欠落していた。例外的に偉大な個性のみが自己完成を為し遂げうるというのである。この文化と個性の崇

拝が，19世紀ドイツの主たる信仰の一つとなった。だが，やがてそれが導き出したものは，文化と政治の堕落であった。学校の人文主義教育は，博識な市民を育てたとはいえ，彼等に理想主義の諸理念の深い理解を与えはしなかった。彼等がドイツ文化に陶酔し，自らをその担い手だと感じるのは，ゲーテ，シラー等の名と，適当な名句に簡約されたそれら偉人の言葉を呪文のように唱えることによってであった。このような「念仏主義」は，文化はそれを受動的に享受するだけで十分だという態度を生み出し，文化を発展させようとする意欲を失わしめることとなった。

更に重要なことには，文化が無責任政治を合理化する口実となったことである。文化は政治とは全く別物であり，政治の如何によって文化の価値は左右されるものではない。従って，文化が優れてさえいれば，いかなる政治をも甘受しうる，と考えられたのである。

なるほど，この文化と個性の崇拝は，19世紀初頭には，政治的熱望と結びついており，自由な社会の創造への拍車としての役割を果していた。自由主義者はすべて，既存の社会，政治諸制度を自由な個人の成長を妨げるものとして，これらとたたかったのである。自由主義のプログラムに関して，彼等の間に意見の不一致がみられたのは，唯一点においてにすぎない。それは，自由主義社会のキャップ・ストーンである議会制度創設の問題であった。文化を崇拝して政治を軽視する態度が，政治的自治を求める力を鈍らせていたのである。

以上の如き文化崇拝，文化に対する姿勢は，教養あるドイツ市民の間に，曖昧なとらえどころのない生活感情，生活様式を形成し一般化した。これがドイツ政治の知的前提である。ドイツ社会において有力な地位を占めているこの階級の自覚的な非政治的姿勢こそ，ドイツ政治の失敗の原因なのである。非政治的理想主義のもつ政治的意味が明確に現われたのは，1848年の失敗からビスマルクの成功に至る期間である。ドイツ自由主義者の多くは，ビスマルクに降伏し，政治的自治の要求を放棄した。その際，自由主義者達は，より高い国家目的のために必要な犠牲だとして，屈服したのではなく，

政治というものと一切合切絶縁したのである。政治は，理想，道徳の領域とは無関係であり，権力と精神とは別個のものだと主張したのである。シーザーのものはシーザーに，政治の領域におけるマスターとしてビスマルクは受け容れられねばならない，というわけである。ここに，成熟した非政治的ドイツ人が誕生した。理想主義への逃避が，国家権力によって妨げられさえしなければ，いかなる政治的不正をも甘受する，善良にして寛容なるドイツ人が現われたのである。

1871年以後のドイツにおいては，新帝国に対する態度によって，知識階級を三グループに分けることができる。帝国ドイツに批判的なグループ，非政治的領域に逃避したグループ，および帝国ドイツを理想化するグループがそれである。急速に成長する労働者階級に対して彼等知識階級のいだく恐怖感，ならびに，文化と民主主義とは相対立するものだとする主張が，第一のグループを弱体化させ，第三のグループを強力なものにしていた。それゆえ，非政治的人間を自称する人々も，ドイツ文化を守るためにという大義の下に，帝国ドイツのとる保守的政策のすべてを支持し，ラディカルな運動には反対することができた。財産のみならず，教養も保守主義の防波堤となったのである。これら知識人の一部は，更に進んで，ドイツの帝国主義的政策を積極的に支持した。文化と宗教を混同していた人々にとって，自己の優越した文化が劣等文化を駆逐するのは当然と考えられた。文化的ダーウィニズムによって，ドイツの向う見ずな世界政治への進出が正当化されたのである。ドイツ理想主義，ドイツ文化を普遍的に勝利せしめるというドイツ的使命によって，ドイツの帝国主義的拡大は，道徳的に正当化されるに至った。非政治的精神の政治的危険性がここに示されている。文化と個性を崇拝する「理想主義教」は，ますます政治的威力を発揮した。ドイツ理想主義の錦旗をかかげ，「ゲーテ，シラー」という念仏を唱えつつ，自称非政治的ドイツ人は，自由主義，民主主義，社会主義を攻撃した。このように階級的私心に満ち，現状維持を望むばかりか，侵略的政策さえも神聖化する口実としての理想主義を通俗的理想主義と名付けることができよう。

1914年，理想主義の伝統は悲劇的頂点に達した。西欧からの攻撃に怒ったドイツ知識人は，ドイツ理想主義の反西欧的内容を最高点にまで沸騰させた。ドイツ国民の非政治的性格が美化され，理想主義の伝統こそが，政治の代用物として，ドイツが誇るべきものと宣言された。「ドイツ人は君主主義的国民」(トレルチ)，「ドイツ人の性格に相応しいのは官憲国家のみ」(マン)とまで断じられるに至った。それゆえ，大戦後のワイマール共和国に対しては，ドイツ教養階級は冷淡であり，彼等の大部分は非政治的理想主義に後退した。それは，かつての如く，現体制を先験的理念で粉飾する理想主義ではなく，実現しうべくもない神秘的理想の名において共和国を非難するものであった。現在を拒否すること，ワイマール共和国を軽蔑することが，理想主義に適ったことと考えられた。

しかし，より大きな災禍が，この非政治的ドイツ人に降りかかった。ヒトラーが，唯物論，利己主義に痛罵をあびせ，現在を拒否し，内乱の停止，社会的調和の確立，統一と指導権，権力と信頼を約束したのである。即ち，ヒトラーのニヒリズムは，まさに理想主義なのであった。これが，ヒトラーを勝利に導いた条件である。非政治的なドイツ教養階級は，ヒトラーのこの理想主義的プロパガンダを前にして，これに反対すべきかどうか躊躇した。ヒトラーの成功を助勢したのは，1933年以前にナチ党に加入した少数の教養人ではなく，ヒトラーに反対しなかった多数の教養人であった。1933年以後でさえ，多くの教養あるドイツ人は，ナチスの犯罪性に対して盲目であった。彼等は常に政治を嘲ってきたので，自由な政治社会の欠如に困惑することはなかった。彼等の多くは，非政治的領域に隠退した。

非政治的ドイツ人の曖昧模糊とした理想主義は，ヒトラーの過剰さの後は消滅してしまった。今や，ドイツ人があれほど嫌悪していたドイツ文化のアメリカ化が，着実に進行している。

(三)

一般に，非政治的姿勢，政治的無関心の態度は，現体制維持のための重要

な基盤である。被支配大衆は，積極的働きかけがなければ，政治的関心が希薄であるというのは，その存在条件からして当然であろう。だが，教育程度が高く，社会的に有力な地位にある人々の非政治的姿勢は，意識された，自覚的なものと考えられねばならない。従って，そのような人々のかかる姿勢は，現秩序の維持を明確に前提としていると看做されよう。スターンは，ドイツ社会において有力な地位を占める市民階級，就中教養階級の自覚的な非政治的姿勢が，ドイツ政治失敗の条件だとしている。彼等の非政治的姿勢こそ，48年の敗北，66年の「屈服」，ヴィルヘルム二世下の帝国主義政策，ワイマールの分裂，そしてヒトラーの成功，これらのものの基礎であると論じている。また，非政治的理想主義のゆえに，66年の「屈服」は，ストレートに屈服とは受け取られなかったのであり，ビスマルク，ヴィルヘルム二世，更にヒトラー支配の下でも，自由であると感じることができた，としているのである。

そこで，まず，この「屈服」を問題とする場合，注目しなければならないのは，あの自由主義的歴史家バウムガルテンの「自己批判」であろう。彼は，66年の「われわれの敗北が最高の救い」[13] だったと述べている。ここには，屈服の悲しみよりは，むしろ自由主義の目標たる「自由」と「統一」のうち，「統一」が達成されたことに対する喜びが読み取られよう。仮に屈服であるとしても，それは喜ばしい「屈服」であったのだ。スターンは，この「屈服」を，自由主義者達の「理想主義教」に基づく「政治との絶縁」によって説明している。即ち，それは，本来自分達とは無縁の存在である政治の世界での敗北であるがゆえに，屈服とは受け取られなかったと。しかし，上述した観点からして，この分析は不十分だといえよう[14]。なんとなれば，この「屈服」は，まず，ナショナリズムとの関連において理解されるべきものだと考えられるからである。

ところで，ドイツ人は非政治的国民だということがいわれる。勿論，ヤスパースも言うように，国民性とは，「その国民の歴史的発展の一時的帰結」[15] にすぎない。だが，国民性が，ある国民に与えられた不変の宿命的本質では

なく，歴史的に形成されたものであり，また，当該国民の一部分の性質にしかすぎないとしても，それが政治の一与件であることは疑いない。スターンは，ドイツ市民階級の非政治性をドイツ史に一貫しているものとして取り上げている。そして，彼は，その起因するところを理想主義に求めている。果して，そのような捉え方だけで，事態を正しく認識したことになるだろうか。この点が問題となる。

そもそも，ドイツ理想主義は，フランス革命のドイツ版といわれるように，後進ドイツに屈折ないしは逆立ちした形で移された啓蒙思想なのである。分立する小諸邦国の封建的，絶対主義的支配という隷属状態にあって，個人の解放は，社会的，政治的自由にではなく，内面の自由において求められることとなった。また，肯定しうべくもない遅れた現実と諸個人を超えたところに，普遍的，客観的理念は設定されざるをえなかった。宮廷や貴族をパトロンとしなければならなかったドイツの思想家達の奴隷根性[16]，社会変革の担い手たるべきブルジョアジーの弱さ，未だ封建的支配関係の下に眠っている大衆，これらが，ドイツ理想主義をして，非政治的たらしめた原因なのである。同様に，ドイツ市民階級の非政治性の因ってきたるところも，まずはその政治的，社会的，経済的条件の中に見出されねばならないであろう。

ライン自由派の綱領に典型的にみられる穏健な政治的要求も，3月革命以後は差し控えられてしまった。その要求を実現すべき再度の機会であった憲法紛争に際しても，ナショナリズムの波に巻き込まれて，自由主義者達は「屈服」してしまった。この政治的自由を自らの手で担うという点でのドイツ市民階級の弱さは，何に起因するのか。先に触れたナショナリズムとの関連とならんで指摘されねばならないのは，次のことである。即ち，3月革命において自ら目撃し，フランスでもその力が実証された大衆運動，就中プロレタリアートに対する彼等の恐怖心がそれである[17]。政治権力を断念し，絶対主義権力に身を寄せながら経済活動に専心する，これがドイツ・ブルジョアジーの戦略であり，処世術であった。従って，文化崇拝が，市民階級の「政治的自治を求める力を鈍らせ」，「理想主義ゆえに政治と絶縁」した，とする

スターンの主張は，一面的だといわざるをえない。ドイツ市民階級の非政治性を彼等の理想主義によるものとする見解は採ることはできないということなのである。むしろ，彼等の「理想主義教」は，現体制の維持を前提とし，その中で自己の階級的利益を追求することに，大義名分を付与するためのイデオロギーとして把握されねばならない。従って，それを支配的思想たらしめんとするイデオローグ（スターンの言う教養階級，知識階級）の中に，その典型的表現を見出すことができるのである。マイネッケが，ドイツ的なものとして指摘する「現実的なものを普遍的世界観に高めようとする傾向」[18] も，上の点を説明するものと理解されえよう。それゆえにこそ，この非政治的理想主義は，「俗物根性の形而上学たる通俗的理想主義」[19] に変質し，政治的威力を発揮したのである。

ドイツ市民階級は，自ら政治的自由を勝ち取る勇気も意思も失った。理想主義は，そうした政治的態度を合理化するための口実とされた。こうして，自覚的な非政治的姿勢は生じたのである。理想主義の非政治性は市民階級の中で強化され，内容は形骸化されて，彼等のイデオロギーとなった。この口実としての理想主義への逃避，いわば自主規制としての非政治的姿勢が，世界観にまで高められた時，それを確信する人々にとって，政治的自由の欠如は苦痛と感じられなかったであろう。そして，このイデオロギーが，現実政治の中での一与件として作用し，ドイツの自由主義的，更には民主主義的発展に対して有害な影響を及ぼしたことも否定できない。また，他の国家主義的思想伝統とならんで，ナチズム受容の精神的準備となったであろうことも。

以上述べたドイツ自由主義と市民階級との関係についての，F. ノイマンの評価はより苛酷である。即ち，彼は次のように断じている。「ドイツでは中産階級以上に腐敗した集団はないのである。彼らが自由主義にくみしたことはかつてなかった。ドイツの全歴史を通じて，『市民』は他の人々——ドイツ人労働者であろうと外国人労働者であろうと——の犠牲においてよき生活を獲得しようと試みつづけてきた。ドイツの岐路のすべてに際して（1813 年，

1848年，1862～6年，1914年)，市民は対外征服と反革命に自由主義を売り渡したのである。」[20]

最後に付言すれば，第二次大戦後は，ドイツ文化のアメリカ化が進み，非政治的理想主義は消滅した，とスターンは述べている。だが，ヤスパースの警告，ミッチャーリッヒの心理学的研究，宮田教授の政治意識分析[21]等が明らかにしているように，西ドイツの状態は，スターンのいうイリベラリズムが決して消え去ってはいないことを示している。

注

1) 矢田俊隆「ドイツ三月革命と自由主義」(年報政治学，1964年『近代革命の再検討』，63頁) 参照。
2) 拙稿「ドイツ自由主義研究序説」(法学論叢，第84巻，第5号) は，この点を詳細に検討している。
3) Guido de Ruggiero, The History of European Liberalism (translated by R. G. Collingwood, London, 1927), p. 14.
4) H. ロートフェルス「第三帝国への抵抗」(片岡・平井訳，1970年) は，この教義が，ドイツにどのような影響を与えていたかという点で興味ある指摘をしている。即ち，自由主義的プロテスタントは，この教義ゆえに，ナチ体制に対してはほとんど抵抗力をもたなかったというのである (同書，51-55頁)。
5) E. トレルチ「ヨーロッパ精神の構造—ドイツ精神と西欧」(西村貞二訳，1952年)，100-101頁。
6) トレルチは，ドイツ理想主義において，自由がいかなるものであったかを，次のように説明している。「精神の解放が公共的事項にではなく，根本的には魂の内部に，つまり個人の自由や思想の躍動と深みに沈潜し，空想や詩的世界に佇むという結果を必然的に伴った。こうしてドイツの自由思想は根絶し難いまでに個人的人格的自己形成への方向をたどった。」(同前，99頁)。
7) 矢田俊隆「ロマン主義と民族観念」(岩波講座「現代思想」III，1957年，55頁)。
8) A. & M. ミッチャーリッヒ「喪われた悲哀—ファシズムの精神構造」(林・馬場訳，1972年)，9頁。
9) G. ルカーチ「ニーチェからヒトラーまで」(平凡社『ドキュメント現代史3—ナチス』，310頁による。)。
10) 上山安敏「法社会史」(1966年)，328頁。
11) Fritz Stern, The Failure of Illiberalism: Essays on the Political Culture of Modern Germany (New York, 1972), First essay: 'The Political Consequences

of the Unpolitical German'.

12) Ibid., Introduction, p. 17, p. 28。スターンは，イリベラリズムが1878年以降のドイツの政治的，精神的風土を特徴づけるものであるとし，ヒトラーはその伝統の最悪の化身であると断じている。そして，彼は，イリベラリズムを，ドイツの政治体制及び精神状態にみられる反自由主義，反民主主義，ナショナリズム信仰，権威主義などと定義している。

13) 望田幸男「近代ドイツの政治構造」(1972年), 165頁による。

14) この点に関連して興味をひかれるのは，ミッチャーリッヒ（前掲訳）の分析である。彼は，ドイツ人の特質として「悲しむことの不可能」を挙げている。1945年の敗北という事実を，人種とか文化という点では自分の方が遙かに優越している相手からのものだとして，否認する態度を，そう名付けているのである。人は悲しみをのりこえて成長する。悲しみを否認するところに進歩はない。ナチス支配という悲しみを悲しむことのない西ドイツに，政治的，精神的発展はない。自由，民主主義の喪失を悲しまず，再び与えられた「自由，民主主義」にただ付き従うにすぎないところでは，自由，民主主義は定着しない，というわけだ。同様に，66年の「屈服」も悲しまれなかった。

15) K. ヤスパース「ドイツの将来」(松浪信三郎訳, 1969年), 121頁。

16) Friedrich C. Sell, Die Tragödie des deutschen Liberalismus (Stuttgart, 1953), S. 23.

17) F. エンゲルス「『ドイツ農民戦争』(1870年および1875年版）への序文」，「ブルジョアジーは，自分の政治権力を即刻断念することによって，自分の徐々の社会的解放を買いとるのである。ブルジョアジーがこういう契約を受け入れる気になった根本の動機は，政府にたいする恐怖ではなくて，プロレタリアートに対する恐怖にあることは，もちろんである。」(大月書店，マルクス＝エンゲルス全集第7巻, 548頁)。

18) F. マイネッケ「ドイツの悲劇」(矢田俊隆訳, 1951年), 20頁。

19) Stern, op. cit., Introduction, p. 37.

20) F. ノイマン「ビヒモス」(岡本・小野・加藤訳, 1972年), 491, 494頁。

21) ヤスパース，前掲訳，ミッチャーリッヒ，前掲訳，宮田光雄「西ドイツ精神の構造」(1970年)。